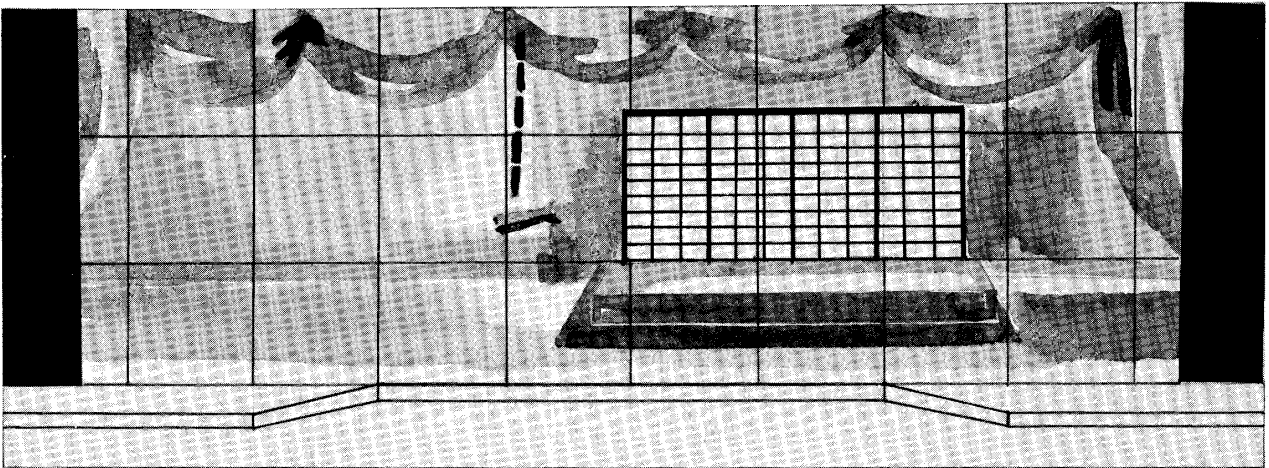


創作オペラ「吉四六昇天」の装置と幕間版画制作について

舞台装置と幕間のための版画

The Stage-setting and Papercut (Printing) in Intermission for the Opera created, "Kichiyomu's ascending to Heaven."

大 蔵 善 雄



第一景

序文

昭和48年10月1日 大分文化会館大ホールにて公演
作 宮本清 台本 阪田寛夫 作曲 清水 脩
演出 桂直久 企画製作 大分県民オペラ

このたび第九回大分県芸術祭主催行事として、「吉四六昇天」が上演された。県民オペラとしては第五回の公演である。私はこの「吉四六昇天」の装置と美術を担当して阪田氏の台本、桂氏の演出の中に吉四六の持つ反逆精神とオドケ、大らかな人間性、そして次から次に飛び出してくる機智、さらに底に流れる人間らしさにいたく感動した。

そして「吉四六ばなし」のエスプリを、あらためて見直したのである。桂氏と親しく話しあってより氏の演出のイメージに近い装置を表現しようとしてこゝろみたものである。

以下「吉四六昇天」をよりわかりよくするため、装置と幕間の版画にものがたりを添付した。

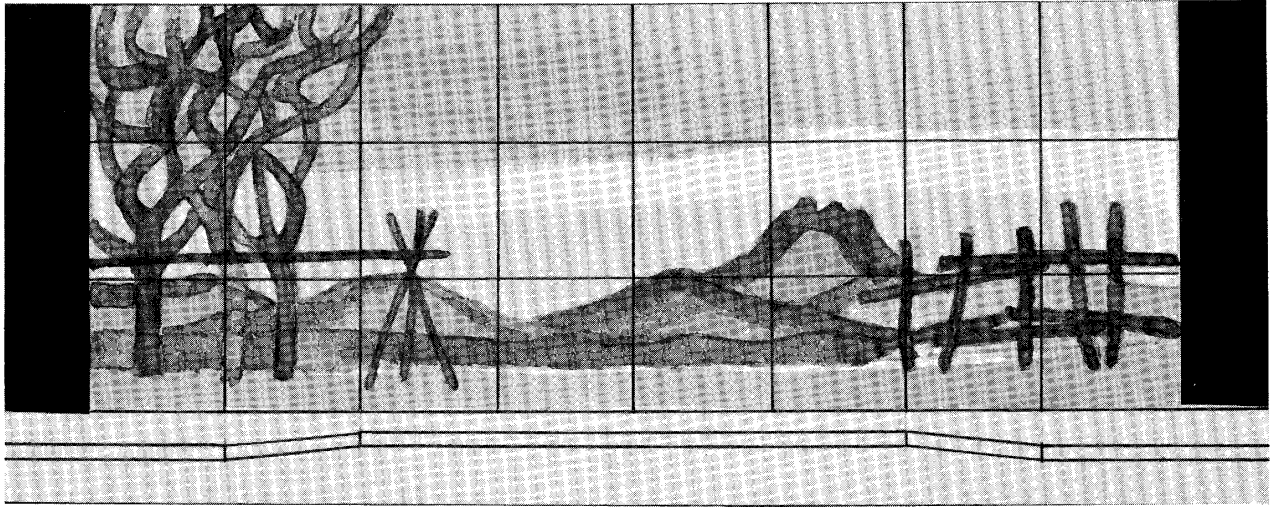
尚、使用した大分文化会館大ホールの舞台は高さ3間、巾10間であった。添付した舞台のイラストレーションはその寸法の碁盤目にあわせてかいたものである。

註1. 時代は江戸時代の初期

プロローグ

幕ひらく、中幕前。語り手が寝ていて、子供達がとりまいている。舞台下手から薪を山ほど背負ったやせ馬がよたよた出てくる。

プロローグ 子供たちが、寝ている爺様を起こして、「吉四六ばなし」をしてくれと頼む。爺様は、「昔むかし、吉四六さんがのう、馬を曳いて山にたきものを取りに行ったんと…」と話し出す。そこへ吉四六が、馬にた



第二景

き木を背おわせて「さてん さてん豊後の国の 野津市村に吉四六ちゅうち…」と歌いながら現われる。やせ馬のことで、もう馬はクタクタ。とうとう歩けなくなり、吉四六は馬の背中からたき木を三把ばかりおろして自分でかついでやる。少しは楽になった馬は、また歩き出す。吉四六は楽になった分だけは、わしが乗ってもかまわんだらうと云って、今度は自分が馬に乗り、意気揚々と「はいよう はいよう そも吉四六ちゅうち あっちえん あられん 賢え奴なりや…」と歌っていい調子になる。やせ馬は「よだきいのう」と云いながらふらふら歩き出す……。

吉四六 馬に乗ったまま退場。
暗転して 中幕ひらく

第一幕

吉四六の家の外 隣の嬢をはじめ近所の連中が洗濯しながら吉四六のことを大笑いしている。下手に吉四六の家と木立ち、上手に隣庭と堀 舞台前面に小川が流れている。吉四六がひょこひょこ下手の土手から現われるが一同は気付かず歌い笑う。

吉四六、ザルを持ったまゝ、舞台前面の川の中に入る。

第一景 吉四六の家の外 村の洗濯場 近所のかみさんたちが、洗濯しながら吉四六のやせ馬の話や、吉四六の顔のことを互いにけなして大笑いをしている。(宇目の唄げんか) その時吉四六が土手に現われ、かみさんたちの話や笑いをじっと聞いているが、何を思ったのか、やせ馬とザルを片手に皆の前に現われる。隣の嬢は、吉四六のやせ馬を口ぎたなくののしる。馬が糞をたれるので、吉四六はその糞をザルにうけ、さも大事そうに川の中で洗い出す。一同は驚き、洗うことを止めさせるが、吉四六は一向お構いなく糞を洗いながら銭を取り出す。この不思議な光景に、かみさんたちも次第に吉四六の周りに集まり、ザルの中の銭をのぞきながら吉四六と共に歌い出す。銭に目のない隣の嬢は、急に猫なで声で吉四六に、このやせ馬を一両で売ってくれと頼むが、吉四六は断る。嬢の亭主も出てきて、とうとう十両で話がつき、やせ馬を吉四六は売る。隣の嬢は早速やせ馬にカイバを食べさせ、嬢と亭主は今か今かと糞の出るのを待っている。やがて待望の糞が出る。二人は狂喜してザルの中の糞を洗い出す。ところが銭は一文も出てこない。

亭主は吉四六を追いかけ、嬢はあまりのことに腰を抜



かす。この光景を見ていたかみさんたちは大笑い。やがて一同は帰り仕度をしながら、近頃この近所に紫色の幽霊が出るそうだと話しながら退場する。

歌の中で、隣の亭主が吉四六を追いまわす。吉四六歌いながら下手へかけこむ。一同洗濯物やたらいをかかえて立ち上がる。

暗転

第二景

前と同じ場面、吉四六の家の外 夕焼けが美しい。二景の途中で吉四六隣の境目に垣根を麦わらで作る。

第二景 前場 いきなり隣の嬢と亭主のけんかが始まる。互いに、銭をたれないやせ馬を十両もの大金を払った責任をなすり合う。そこへ吉四六の女房がやせ馬を曳いて恐縮した様子で現われ、「カイバに銭をまぜて食わせば、食べただけの銭が出てくる」と吉四六の話を伝える。この話を聞いた亭主と嬢は、またおこり出し、吉四六の女房に銭を返せと迫り、やせ馬に八つ当りする。馬は隣の家の方へと歩き出し、嬢はタズナにしがみつつき亭主とけんかをしながら馬に引きずられて家に入る。

そこへ吉四六がワラをかついで現われ、隣のけんかがうつらないようにと、ワラで垣根を作り出す。これを見ていた女房は、ついに我慢し切れずに里に帰ることを決意する。隣ではすさまじいけんかが続いている。女房が退場した後へ、紫の着物を着た若い娘が現われ、吉四六の姿を見て逃げ出そうとするが、吉四六はこの娘を女房だと感違いをし、里帰りをすると急に美しくなるものだなあと感心する。娘は自分が幽霊だと告げるが、吉四六は平気でこの娘に、垣根作りの手伝いを頼む。近くに



人の気配がするので、娘は吉四六の手を取って退場する。

夕闇迫る中にハダシで紫色の衣をまとった若い娘が風が吹かれるように下手からあらわれる。

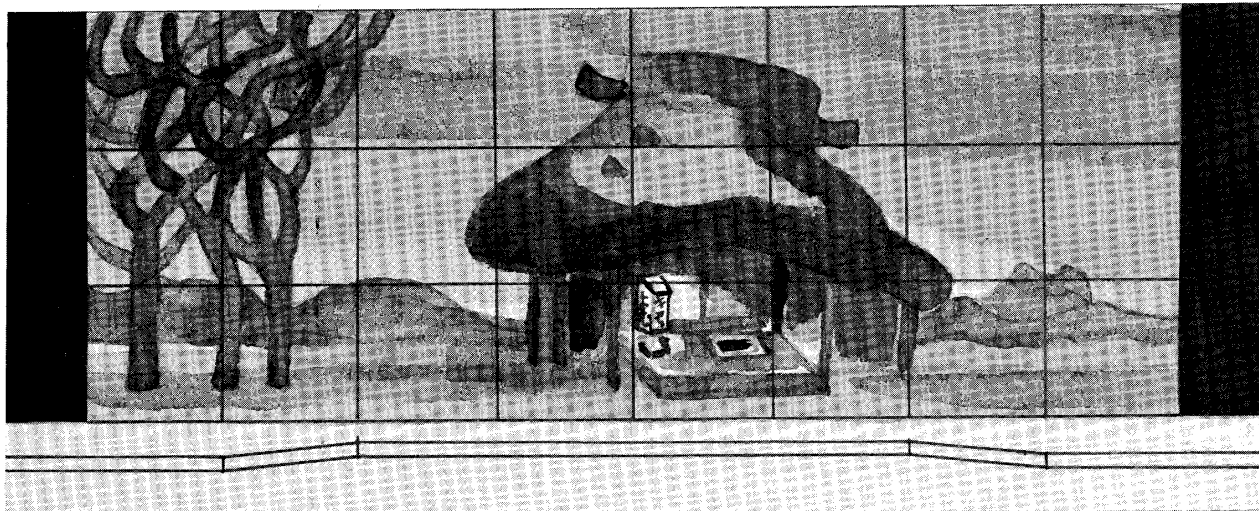
娘吉四六の手を引いて下手へ急ぎかけこむ。

暗転

第三景

木立ちがあり、家の中で吉四六と娘が祈りながら歌っている。娘の紫色の衣はひどく破れている。部屋の中に自在カギと、破れた行燈がおいてある。

第三景 吉四六の家 娘は「サンタマリア わがとが
第三景





を許したまえ」と歌う。吉四六は、この娘はどこかで見た顔だと考えながら身の上を聞く。娘は天を仰いでキリストの名を呼ぶが、彼女の歌に吉四六もつられて「なんまんだぶ」と唱和する。娘は吉四六に、家事を手伝うから他の者には内緒でこの家にかくまってほしいと頼む。

吉四六は大喜びでその願いを聞き入れ、もう一度二人でお経をあげようと云って、娘は「きりえれぞん」と歌い、吉四六は「なんまんだぶ」と気持よさそうに歌う…。

娘かたちを正してうたいだす。吉四六うれしそうに調子をあわせて唱和する。

幕

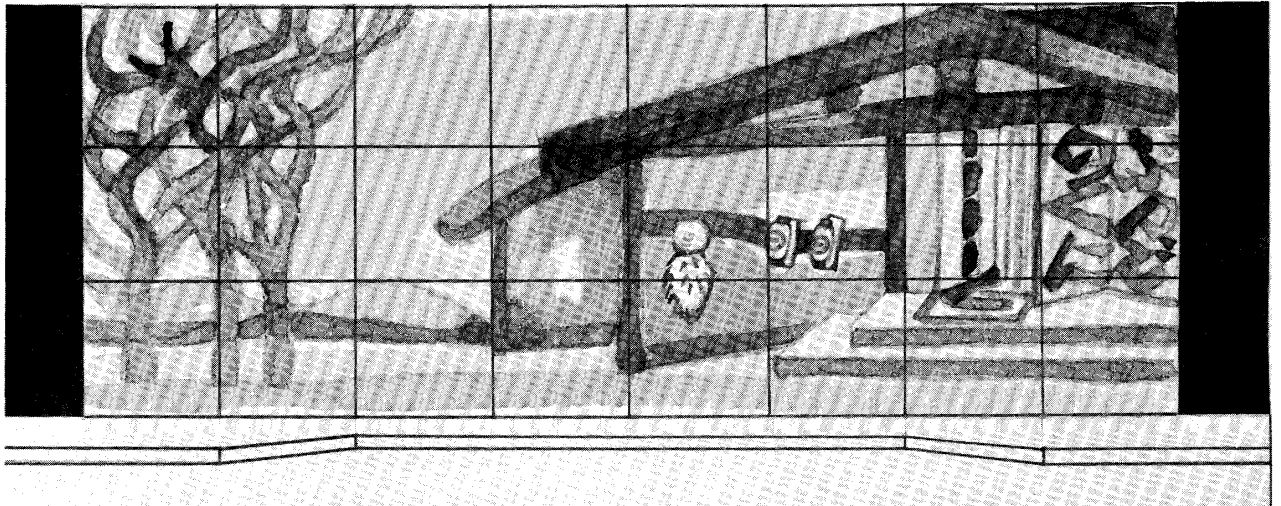
第四景

幕ひらく 庄屋の家の広い土間 下手に吉四六 上手に庄屋が苦虫かみつぶしている。土間には下男たちが働いている。

第四景 庄屋の家 庄屋は吉四六に、馬を売り、女房に逃げられれば、米作りに精が出ず、大事な年貢にも影響すると叱りつける。すかさず吉四六は、年貢にことかくと庄屋さんは殿さんからどやされるとからかう。庄屋はますますおこりだし、下男たちが吉四六の腕をねじ上げる。下男が吉四六の腰にしめている紫のひもを見つけて問いたゞすが、吉四六は幽霊から借りてきたと云う。

下男たちはその話に薄気味が悪くなり逃げだす。そこに嬢が出てくるが、吉四六はその嬢の顔を眺め、あの幽霊の娘とあまりにもよく似ているのに驚く。庄屋は嬢と何やら耳うちをして、急に態度を変えて吉四六に酒をもてなす。上きげんで飲み始める吉四六を見て、庄屋はそっと出て行く。嬢は次から次へと吉四六に酒を飲ませ、ついに吉四六は土間に酔いつぶれる。庄屋が帰り、吉四六の家に娘がいたことを嬢に告げる。庄屋は、吉四六が寝ている間に娘をつかまえて座敷牢に入れ、もしもまた逃げれば今度は殺すと話す。この話の途中で吉四六は目をさます。驚いた庄屋は、この密談を吉四六が聞いていたのではないかと心配して、吉四六に問いたゞすが、吉四六は何も聞いていないと云う。それでも信用できないと庄屋が迫るので、吉四六はそれならその密談をもう一度話してみても、もし聞いていたら聞いたと正直に云うからためしに話してくれと云う。庄屋はついのせられて、その話を初めから歌い出す。話が全部終わったところで吉四六は、その話は全部聞いていないと云う。ほっと安心した庄屋は、また吉四六に酒をすすめるが、嬢にうなが

第四景



「吉四六昇天」の装置と幕間版画作成について



されて、自分のまぬけさに気づき、吉四六を脇差でおどす。庄屋は吉四六に今夜一人残らず村人をどこかへ集めることを命令する。吉四六はしかたなく承知する。その時どこからともなく「なむ はらいそ」という声が流れ、吉四六は「なんまんだぶ」を唱える。庄屋と嬢が退場した後、暗闇の中で、「吉四六が今夜はしごをかけて天に昇るぞ」という村人たちの声が聞えてくる。やがて吉四六が一人現われ、「銭別をうーんと持ちここう…」と歌う。

かけ合いの音楽がきこえる

なむ はらいそ なむ はらいそ
きりえ れえぞん きりえ れえぞん (女性合唱)
なんまんだぶ なんまんだぶ (吉四六)

暗転 暗い中で あっちこちから声が聞える

今晚 暮れ六つ 吉四六が天に昇るぞお 川下の田圃でも又、吉四六が天に昇るとお……。

第五景

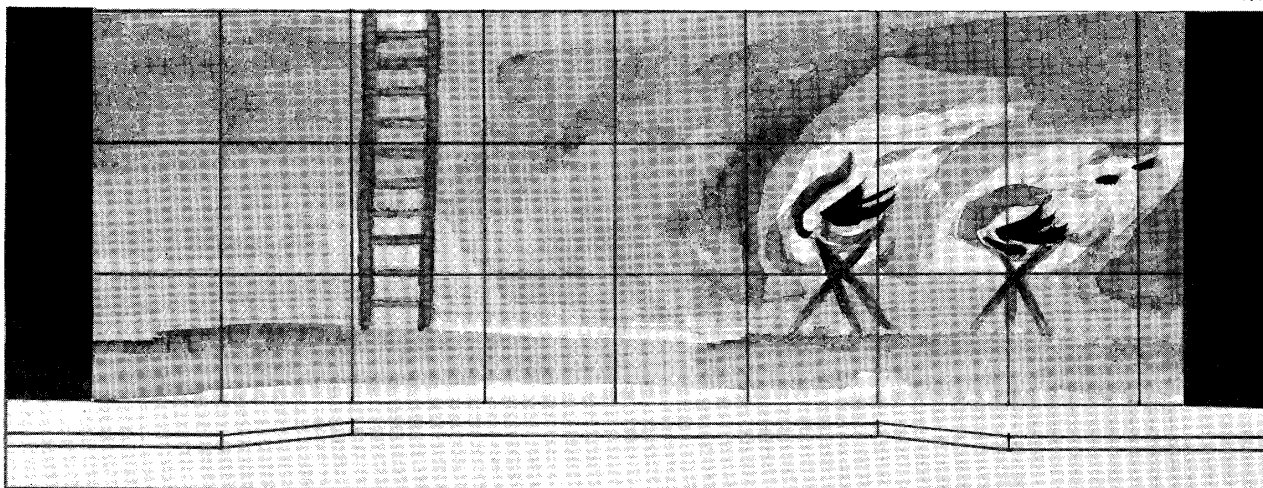
暗闇の田圃 背景は闇。田圃にかぶり火を をいている。舞台上手に はしごが立っている。(その先は、天井にかくれて見えない。)

村人多勢集っている。老若男女が、ガヤガヤ話しながら吉四六に別れを告げて、センベツなど渡している。皆手にはタイマツを持っている。

第五景 暗闇の田圃 いよいよ吉四六の天昇りが始まる。村人たちは、吉四六に気をつけて昇るよにとにぎり飯や真綿を渡して元気つける。そこへ覆面をつけた庄屋と、下男が大きな太鼓を持って現われる。吉四六はここで、長い間お世話になりましたと別れの挨拶をする。そして、わたしが昇り始めたら「吉四六さんの天昇りあぶないもんじゃ」と歌い踊ってくれと頼む。太鼓の音と共に一同はにぎやかに歌い踊り出す。庄屋はこれを見届けて姿をかくす。突然吉四六は降りて来て、「皆の衆がそんなに天昇りがあぶないというなら、止めにしよう」と云う。そこに隣の亭主と嬢がはしごの下にかけ寄って、

ここは吉四六の田圃で、わしらを踊らせて馬の代りに田圃をねらせたのだと叫ぶ。一同は怒り出し、再び吉四六を上を追いつける。庄屋が再び現われ、この光景に満足しているが、その時庄屋の嬢がかけこんできて、嬢が座敷牢の中でノドを突いて自殺したことを告げる。庄屋は何やら考えながら、村人の踊りを止めさせ、吉四六に向って、あの嬢を殺したのはお前だと決めつける。一同は驚きざわめく。吉四六は嬢殺しを否定するが、庄屋は吉四六に降りてこいとどなる…。

第五景





村人のざわめきが聞える。そのざわめきの中には「そこまでなくても」という同情のリアクションもある。

暗転

第六景

雲の中、先ほど（第五景で）下半分の見えていたはしごの先が、舞台中央から二メートルばかりのびている。暗い背景に星がともり雲が流れる。つまり地上十数メートルの梯子の先からの眺めである。吉四六、その梯子につかまって、上へも下へも行けずという表情である。

第六景 雲の中 吉四六は雲の中で、「村の衆は昇れ

ちゅうし、庄屋どんは降りろちゅうし…」と困った表情で唄う。下からは庄屋がはしごを切りたおそうとしてマサカリで切る音が聞えてくる。吉四六は、もうこうなったらトンビになって飛んで行くより仕方がないと考えながら、なかなか羽根ははえてこない。その時、雲のかなたに明るく輝く星が見える。雲の中から娘が現われる。娘は自分で命をたったことを話し、今から天に帰ることを告げる。吉四六は娘と一緒に天に連れていってくれと頼む。娘は、それは出来ないが、その代り天のご主人に吉四六がトンビになることをお願いしましょうと云って消えてしまう。下からはマサカリの音が聞える。吉四六はどうとうはしごから手を離してしまう…。村人たちは空を仰いで歌う。

途中星が一つ、ひときわ明るく光る。舞台にスモークが流れて、白い衣の娘が舞台の下手にセリを使ってあらわれる。吉四六とかけ合いののち娘消えて行く。

吉四六星に向かって、急いじよるきいたのみやんすと叫びながら、下に向って「そうれ今から吉四六がとんびになるぞ ピーヒョロ ヒョロヒョローと梯子から飛び下りる。

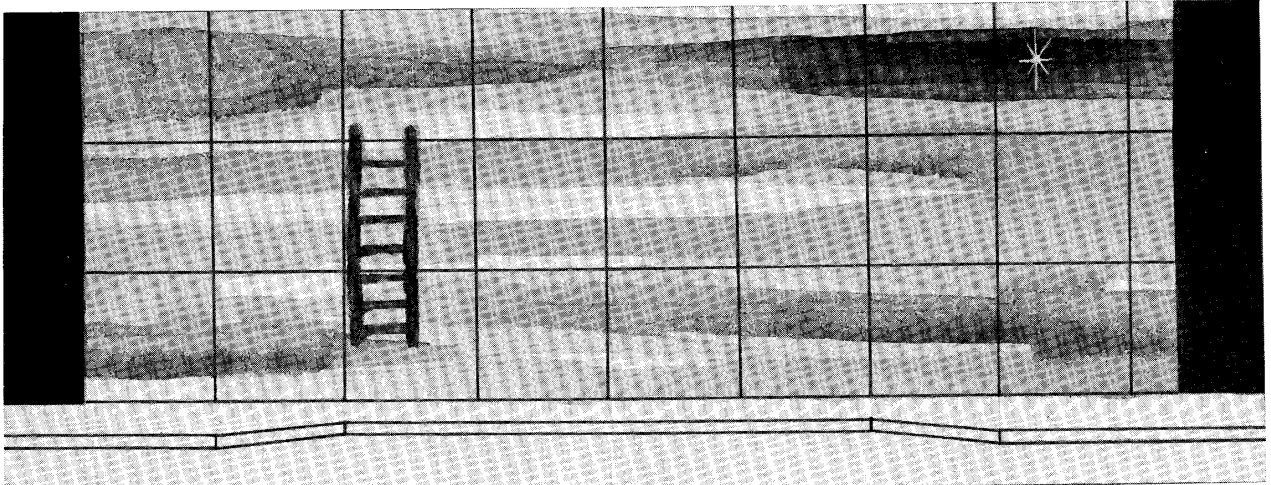
すばやい暗転

エピローグ

プロローグと同じ舞台、天井から自在鉤が一つ降りている。障子の前で語り手と子供たちが向かい合っている。昼間である。ホリゾントは青く染まっている。

エピローグ 舞台は再び前のプロローグの場面に戻る。爺様は、子供たちに吉四六ははしごから手を離したが、トンビにならずに死んでしまったのだと話す。子供たち

第六景



「吉四六昇天」の装置と幕間版画作制について



は、吉四六さんは死ぬ前に羽がはえて、アブラゲをさらって飛んで行き、今でも生きていと云う。どこからともなくトンビの鳴き声が聞えてくる。子供たちは大喜びでその鳴き声の方に走り出す……。

子供達と語り手空を見上げる。子供達空をさし、会場を指さし、別の所を指さし「吉四六さんは生きちよる」「ほーら そこにも来てなはる」「あそこにも来てなはる」とうったえる。ピーヒョロ ピーヒョロリ と吉四六の声が流れる。

幕しまる。

